

このコーナーでは、静岡が有する隠れた地域産業史的な建造物や文化財などを掘り起こし、紹介します。

染色界に多大な影響を及ぼした 芹沢銈介「型絵染」作品の数々



安倍川原(1930年ころ 絁に型染)

静岡市には、紺屋町などの地名が残っており、古くから染めものが盛んに作られてきました。今川時代には、型染や手描きの紋染が行われ、江戸時代に入ると、多くの紺屋(染めもの屋)が繁盛していたと伝えられています。

大正後期に起こった民芸運動の中で、芹沢銈介(1895〜1984)のデザインと地元染色職人の技術が、静岡における新たな和染の興隆の端緒となりました。

芹沢銈介は、静岡市の呉服商の家に生まれ、幼少より書画に秀で、画家となることを夢みていましたが、富裕な生家が類焼し、美大進学を断念。東京高等工業学校図案科を卒業してデザイナーの仕事に就きました。

1928年、上野で開かれた博覧会で柳宗悦らが出品した「民藝館」を訪れた芹沢は、沖繩の伝統的染物「紅型」に出会い、その美に魅せられ、染色の道を歩むことを決意。国画会を拠点に壁掛・のれん・屏風・着物などの作品を発表し、染色界に多大な影響を及ぼし続けました。

「安倍川原」は、静岡市に住んでいた1930年ころ、安倍川右岸から遠くに富士山を望む秋の夕暮れの風景を、窓から眺める風景のように円窓形の中に描いた作品。正確なスケッチを型染によって忠実に表現しています。

1934年3月、芹沢は民藝協会の水谷良一によつて東京・蒲田に工房を与えられ、静岡を離れ、本格的な作家活動に踏み出します。

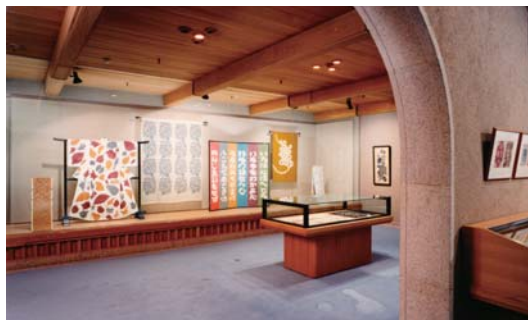
その後、戦後間もない1947年、静岡の若い染め物師たちは、新しい染色芸術をめざして彩紅会を発足。芹沢の指導を受け、それぞれ独自の作品を生み出し、今日に至っています。

芹沢銈介は1956年、「型絵染」で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。

静岡市立芹沢銈介美術館
静岡市駿河区登呂5-10-5
TEL.054-282-5522
<http://www.seribi.jp>



静岡市立芹沢銈介美術館



美術館展示室



芹沢銈介の家(東京都大田区蒲田より移築。毎週日曜日、祝日に公開)